

(発行所)
東京都東大和市南街2-17-16
パピルス会館 〒207-0014
TEL 042(566)2950(代)
FAX 042(566)2949
〈郵便振替〉00160-9-77459
「かんぽろう、日本!」国民協議会
ゆうちょ銀行 019店 当座0077459

1部 300円
定期購読 半年2,000円
一年3,500円

今号の紙面

インタビュー
2-3面 門川大作・京都市長に聞く
4-5面 立谷秀清・相馬市長に聞く
6-7面 稲場幸信・大阪大学准教授に聞く
7-10面 湯む会「社会運動の立ち位置」
湯浅誠・NPO事務局長
10-12面 団心会 東京&京都
「民主主義の負債と公共空間の創出」

「私たち」の問題だ。

「永田町にはウンザリだ、だから主権者ががんばらなければ」とか、「お任せではダメなんだ」という自覚一般にとどまったままでは、(アウトサイダーへの)期待と失望の繰り返しから脱却することはできない。「間違っていない」誰かについていけばいい(自分はフォロワーなんだから)では、フォロワーとしての責任と役割からも大きく遅れをとる。それがはっきり分かるのは、「引き受ける」が具体的に問われる(自治の現場)。

一方で、アウトサイダーへの期待と失望の繰り返しが行き着く先も、永田町から地方政治に移りつつある。しかし受益と負担が可視化できる自治の現場では、制度論の「打ち上げ花火」や「犯人探し」だけでは続かない。国政では地に落ちた感のあるマニフェストも、ローカルでは着実に(バツ)をつけた主権者とバツをつけない主権者の協働として「集積されている」。未来圏からの風を受けて、民主主義の負債を次世代につけ回す無責任連鎖を呑み込むより多様な組織戦を自治の現場から・

「多」の創造

市民(部分最適・現状最適)、負担者市民(全体最適・将来最適)、経営者市民(持続可能性)という区分(10-11面参照)は、賛成、反対、中間派といった区分

の合意不可欠
未来の責任
受益者

とはまったく次元の違うものだ。

負担を分かち合う民主主義にもうひとつ不可欠なのは、結果における満足感よりも、プロセスにおける納得感をどこまでつくりだせるかだ。右肩上がりなら賛否も利益分配で調整できたが、負担以外に分配するものがなくなった今は、賛否を決めるだけではどこまでいっても平行線になり、妥協の結果にはどちらからも不満が残ることになる。プロセスをオープンにし、多数が参加することで、ある人は「納得」し、ある人は「信頼」し、ある人は「反省」し、ある人は「仕方ない」となる。そういうプロセスをどこまで展開できるか、という点だ。

つまり多数派形成、そのための「説得」という意味が、大きく変わるようになる。未来の視点、次世代にツケを回さないという視点、そこから不断に「責任と役割」を問い、適正な負担を求め続ける、そのなかから新しい「私たち」を創りだしていく持続性こそが「説得」の力ギになる。

これは「受益者市民には〜」「負担者市民には〜」「経営者市民には〜」という対策ではない。まずは受益者市民にケジメをつけて負担者市民へ、という段階論でもない。受益者市民をゼロにすることはできないが、そこにも最低限の納得感をつくりだす、そういう多数派形成のプロセスを展開するためには何が必要か、という点だ。

例えば自治体首長について、

タウンミーティングは「標準装備」となりつつあるが、「何かありませんか」と聞かなくては、市民からあれこれの要望しか出てこないのは当然だ。これでは「あれも、これも」という受益者市民しか登場しない。しかし「○○について、現状は○○なっており、それについてA案、B案はこうなっています。市としてはA案でいこうと思いますがどうですか」と問えば、単なる賛否だけではなく、「こういうやり方もあるのでは」とか「むしろ、○○をやめて△△にすべき」という意見が出てくるようになる。「あれか、これか」という負担者市民が登場してくるにつれて、受益者市民のなかにも「将来のことも考えよう」という分岐が始まる。

さらに「必要なサービスですが、借金して、将来世代にツケを回してまでやりますか」と問えば、経営者市民が登場してくる。持続可能な地域経営という視点から公共の領域をどう担うか、そのビジネスモデルが提示されるようになると、多様なパートナー市民が登場するようになる。受益者市民の中からも「腑に落ちた」とか、「納得はできないが、そこまでやるなら仕方ない」という部分もでてくるだろう。それは、未来の視点から新しい「私たち」(共同性)を紡ぎだすプロセスだ。こうして最後に残るのは、依存と分配の本丸になる。

こういう多数派形成ができるなら、選挙で不利になるからといって「適正な負担」を求める政策を先送りする必要はなくなる。むしろ「適正な負担」を積極的に争点にすることで、負担者市民や経営者市民がさらに登場してくるような選挙戦を展開できる。これは、着実に改革を進めている首長の選挙が、それゆえに低投票率になるという新しい「お任せ」構造を断つこと

にもつながるだろう。

否定してもポピュリズムがなくなるように、受益者市民もゼロにはならない。政治に必要なことは、不満を吸い上げるだけではなく「昇華」すること、受益者市民を代表するだけではなく、負担を「納得」できるプロセスを作り出すことだ。そのためには未来の視点から、新しい「私たち」という共同性を創りだすことが求められている。その現場こそ、自治分権の領域にほかならない。

「ポピュリズムを『怖い』と感じるのは、人々の欲望や欲求を固定的なものだと考えるからです。でも本当はそうではない。人々の欲望や欲求は社会的に作り上げられるものであり、それを密なコミュニケーションと想像力を共有する力によって導いていくのが、政治の本来の役割です。中略『私たち』という共同意識を作り上げるのは、政治にしかできない役割です。中略そうした政治空間では、人の負の情念や恐怖心というのは、徐々に和らいでいくものです。この濃密な空間をイデオロギーではなく人為的に作り上げるためには、世論調査に依存するよりもずっと手間がかかります」(吉田徹・北海道大学准教授 日経ビジネスオンライン 5/15)

「市民社会は民主的政府に代わる選択肢ではない。むしろ民主的な態度が養われ、民主的な行動が用意される自由な空間である。それは民間市場の同義語ではなく、営利的な自分本位と市場の無作法を防ぐものである。市民の復活は、ゆえに民主主義の復活を意味する」(「私たち」の場所 消費社会から市民社会をとりのぞく) バーバー著・山口晃訳 慶応大学出版会

消費増税をめぐって永田町にもよって、未来の視点からの

12面へ続く

一面から続く
分岐が走り始めた。同時に依存
と分配一期待と失望の構造も、
「地方」に逃げ込むようになって
くる。自治分権の多数派形成か
ら、民主主義の負債構造を呑み
込む組織戦のダイナミズムを加
速化しよう。

受益者市民から嫌われる決断
を恐れず、次世代へのツケ回し
を断つ一歩は、永田町からも始
まった。さらに未来の視点から

の多数派形成を加速化する、こ
れが次の総選挙への土俵づくり
である。ようやく踏み出した新
しい一歩を逆戻りさせることな
く、「こうなっており、どうなり
うるか」をさらに共有し、未来
に向かって帆を上げよう。

夏季一時金カンパの お願い

未来の視点からの多数派形成を加速化する
主権者運動のいっそうの深化のために
夏季一時金カンパにご協力ください。

〈郵便振替〉00160-9-77459
「がんばろう、日本!」国民協議会
ゆうちょ銀行 019店 当座0077459



かりと伝える機会をあらゆることでつ
くって、結論だけではない、何をどう考
えて、どういう議論をしたのか、そうい
うものを各権者の方々が見られて、一
緒に考えていたということによって、本
当に熟した議論ができるようになると思
います。

上村 今経済学者の間で言われている
「民主主義の生物学的限界」というもの
に、政治の側から挑戦して乗り越えてい
く素地を作って行かなければならないの
かな、と思っています。生物学的限界と
は何ぞや。生物学的にいうと、どれだけ
ロングスパンで見ても、三十年、四十年
なんですね。特に今の団塊世代の方々は
完全な逃げ切り世代です。少子化対策は
大事だと言っているが、その方々が子育
て世代だった三十年前から少子化ですよ
ね。そしてその方々が、子ども手当に反
対している。子どもは大事、でも俺らの
年金は削るな。

それは違う。将来を見据えた時に、こ
うした生物学的限界を、民主主義は乗り
越えていかなければならない。マニフェ
ストにしても、やっぱり最長四年間です。
それを乗り越えていくための努力をして
いかなければならない。

今の社会保障と税の一体改革で言う
と、よく財務省の支配だと言われますが、
財務省支配だったら二千兆円の借金には
なりません。そういう陰謀論ではなくて
きちんと未来に対して責任を持つため
に、民主主義をどう機能させていくのか
とどうかが今、問われていると思っ

います。

戸田代表が、主権者運動というのは人
の心を縛るんじゃない、旧い時代の心
を自由にするための活動だとおっしゃっ
たのは、その通りだと思います。縛られ
た心を解きほぐすと新たな地平が見えて
くる、それが主体的に動く本来の主権者
としての活動だと思います。その取り組
みがこれからも進むことを願っていま
す。

中小路 これまでの自民党型政治が、よ
り多くの人を満足させる政治だったとす
ると、それがもう成り立たなくなっただ
が現実で、そうなった時に何を目指さな
きゃならないかというところ、これは納得
しかないわけですね。より多くの人を納得
できるようにしようと思つと、これはそ

のプロセスにどれだけ納得できるか、と
いうことではないかと思つています。

そうすると、たとえば原発再稼働に賛
成か反対かという二分論で語ると、実は
なかなか納得できるプロセスは引き出せ
ない。何が課題なのかを明らかにして
いろんな意見がある中で、どうやって結
論に到達したのか。そのプロセスによっ
て、多くの人に納得してもらえるんじや
ないか。これが、議会人として目指すべ
き姿なのかなと思つています。

議会に対する信頼感は今なかなか得られ
ないのが現実ですが、それを目指してい
きたいと思つています。

(6月11日。タイトル、小見出しとも文
責は編集部)

□日程のお知らせ□

- ◆「日本再生」読者会
7月8日(日) 午前10時より
「がんばろう、日本!」国民協議会事務所(市ヶ谷)
- ◆北九州「日本再生」読者会(会費 500円)
7月14日(土) 午後3時30分より 小倉商工会館
- ◆大阪「日本再生」読者会(会費 500円)
7月20日(金) 午後7時より ドーンセンター
- ◆京都・青年学生読者会(会費 無料)
7月13日(金) 午後7時より 同志社大学寒梅館

*** 以下は事前のお申し込みが必要です ***

□第115回 東京・戸田代表を囲む会【会員限定】
「八尾市における市政運営」(仮題)
7月19日(木) 午後6時45分より
ゲストスピーカー 田中誠太・八尾市長
「がんばろう、日本!」国民協議会 事務所(市ヶ谷)
会費 同人 1000円/購読会員 2000円

■問い合わせ 03-5215-1330